

演 題 前歯部審美修復治療に対する反省

演者名 豊田 正仰

日 付 2012/02/28

Keywords

1. 前歯部審美修復
2. 診査・診断（基礎資料収集）
3. 患者の審美的要求度

〈抄録〉

前歯部審美修復行うにあたり、顔貌・スマイルラインと歯牙との関係、歯周組織の形態と性状の診査診断が重要である。その上で、安定した咬合状態を確立し、補綴物と軟組織との調和をはかり患者の審美的要求を満たさなければならない。

今回の症例は初診時、54 歳女性で、上顎前歯部の審美障害、左側下顎臼歯部の咬合痛を主訴に 2010 年 1 月当院に来院した。

比較的、歯周組織に問題が認められなかった上顎前歯部は歯内治療を行った後、オールセラミック（ジルコニア）とラミネートベニア修復を計画した。一方、左側下顎臼歯部の疼痛の原因であった「7」に関しては保存不可能と診断し、抜歯とインプラント補綴を行った。

現在、術後約 1 年 6 カ月が経過しているが 1|1 間に軽度の歯間離開を認め、初診時ならびに術中の咬合診断の不足が露呈する結果となった。

本症例を経験したことで前歯部修復治療の診査・診断と、基礎資料収集の精度の重要性を実感した次第です。

症例の反省を含めて、今後の臨床に活かすべく諸先生方のご意見・ご指導よろしく申し上げます。